千葉市六通貝塚出土の縄文時代後期土器群Ⅰ

古谷　渉

1　はじめに

六通貝塚において、1968年８月に採集された資料の一部を紹介する。千葉市立加曽利貝塚博物館に収蔵されている資料のうち、縄文土器４個体が『千葉市史　史料編１』に収録されている。資料の一部は博物館で活用されているが、大半が未整理の状況にあった。博物館では昨年度から収蔵資料の見直し・再整理を検討している中で、今回幸運にも資料の一部を紹介する機会を得た。

六通貝塚はかつての「千葉東南部ニュータウン」、現在の「おゆみ野」の一角に位置しており、貝層部分が畑や果樹園として残されている。㈶千葉県文化財センターの調査により、後期後葉から晩期初頭の貝層断面の一部が剥ぎ取り保存されており、京成ちはら台線学園前駅に近接した公園内に屋外展示されている。

六通貝塚は村田川下流北岸、通称イズミ谷津の最奥部、標高約45ｍを測る台地上に位置する。都川支流の通称仁戸名支谷と村田川水系の分水界が近くに存在する。この付近には木戸作貝塚、小金沢貝塚、森台貝塚、上赤塚貝塚、大膳野南貝塚といった後期の貝塚集落が集中している。貝層の規模は東西140ｍ、南北125ｍの馬蹄形（弧状）を呈しており、集落の時期は縄文時代中期末から晩期中葉までである。

六通貝塚の過去の調査は、1949年に東京大学人類学教室により発掘調査が行われ、1954年には道路工事の際に人骨が検出されている。近年では、1991 ～ 1998年に㈶千葉県文化財センター、2002 ～ 2003年に㈶千葉市教育振興財団　埋蔵文化財調査センターにより発掘調査が行われている。1991 ～ 1998年の調査では、縄文時代中期末の加曽利ＥⅣ式期から晩期前半に及ぶ遺構が検出された。約40軒の竪穴住居跡・多数の土坑・溝が検出され、現在整理作業中である。2002 ～ 2003年の調査では、縄文時代中期～晩期の竪穴住居跡15軒、土坑20基、屋外炉５基、埋甕３基、人骨７体の他、晩期中葉の獣骨層が認められた。遺物は縄文土器（中期・後期・晩期）、石器、土製品、石製品、多量の獣骨が出土した。

2　採集資料の概要

採集資料の大部分が縄文時代後期の土器で、加曽利Ｂ１～Ｂ２式を中心とする復元個体約20個体の他、破片資料がテンバコ25箱分存在する。土器・石器などの無機質人工遺物の他に、獣骨・魚骨などの動物遺存体が存在することや、土器表面に白色付着物が認められることから、貝層出土資料と考えられる。また、赤彩土器も十数点認められ、博物館では自然科学分析を検

討している。

大体の目算であるが、土器の時期別割合は加曽利Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３式が２に対して、曽谷式、安行１・２式は１であり、復元個体の時期にほぼピークが存在する。前後の時期は堀之内１式・２式が十数点、安行３ａ式が数点のみで、採集資料としては比較的まとまりを持つと考えられる。粗製と精製の割合は７：３で、粗製土器（紐線文系・条線文系・地文縄文・斜格子目文）が多い傾向にあるが、集落遺跡としての評価を変える程ではない。

動物遺存体の詳細な分析は今回行わないが、貝類はハマグリ・アサリ・イボキサゴ、魚類はクロダイの下顎骨、獣骨はシカ・イノシシ・イルカが認められる。また、イノシシの上顎犬歯を用いた骨角器の未成品が存在する。他に人骨１体、炭化材が採集されている。

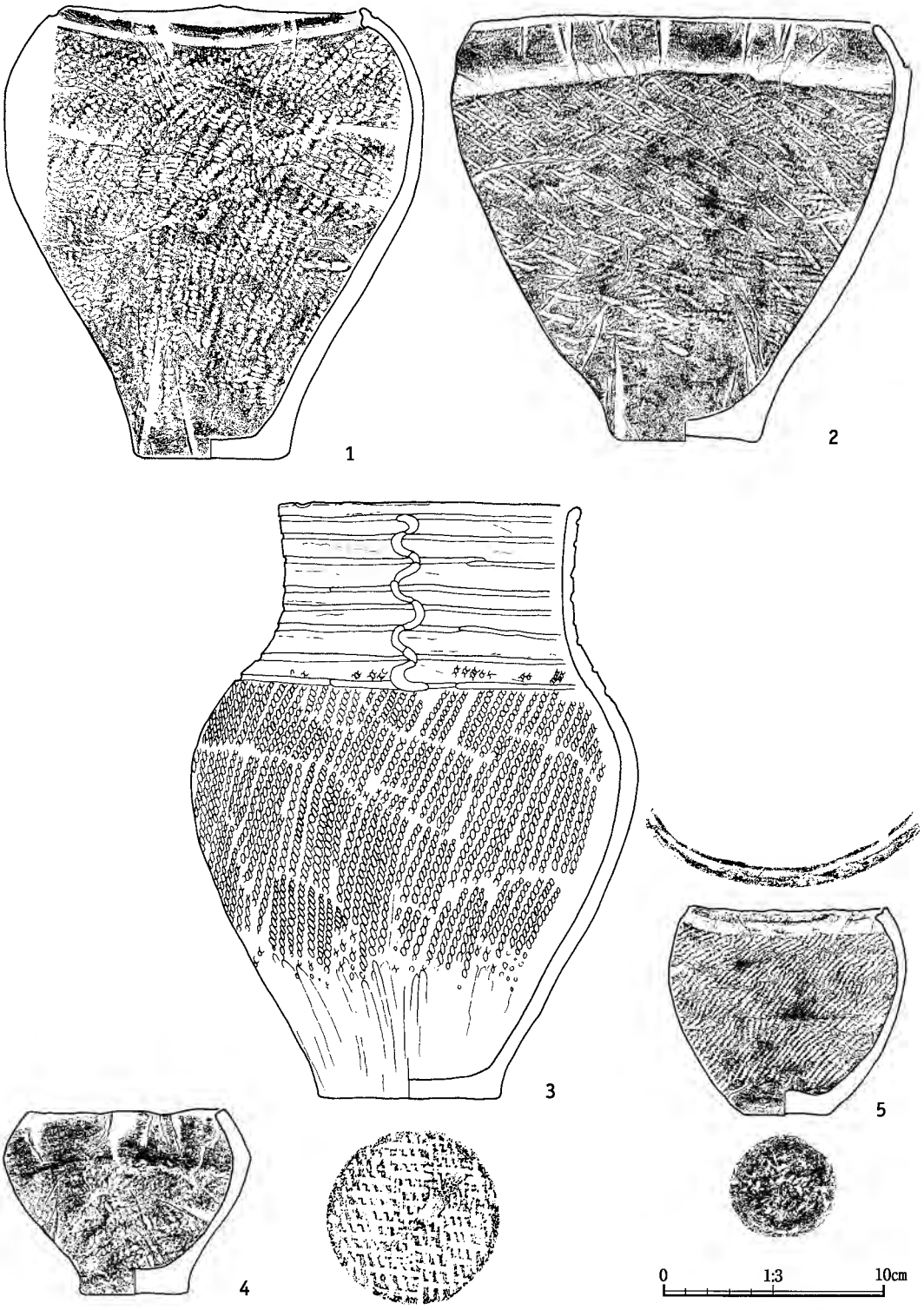
３　土器の事実報告

今回は加曽利Ｂ１～Ｂ２式に焦点を当て、すでに復元され、展示等に用いられている個体を中心に資料化した。第１図－１は加曽利Ｂ１式の深鉢である。口径13.6cm、底径7.0cm、器高20.6cm、胴部最大径19.0cmを測る。口唇部外面と口唇部内面に沈線が1条づつめぐる。胴部には地文縄文LRが施されている。外面調整は口唇部が縄文施文後にヨコナデ→ヨコミガキ、底辺部は縄文施文後にヘラ削り（タテ）→ヨコナデ、底部はナデである。内面調整は口縁部～胴部がヨコナデ→ヨコミガキ、底部が回転ナデ→回転ミガキである。

第１図－２は加曽利Ｂ２式の深鉢である。口径18.2cm、底径6.8cm、器高19.2cm、胴部最大径20.9cmを測る。胴部には地文縄文LR→斜沈線が施されている。外面調整は口縁部が縄文施文後にヨコナデ→ヨコミガキされており、一部に沈線区画もしくは削りの跡が残されている。底辺部は縄文施文後にヨコミガキ・タテミガキ・ナナメミガキ、底部はナデである。内面調整は口縁部～胴部がヨコナデ→ヨコミガキ、底部が回転ナデ→回転ミガキである。外面に白色付着物があり、貝層中出土と考えられる。黒斑は正面と裏側の180°対称位置に２ケ所ある。

第１図－３は加曽利Ｂ２式の深鉢である（註１）。口径14.0cm、底径8.2cm、器高27.2cm、胴部最大径20.5cmを測る。胴部が張り出し、口縁部がすぼまる壺形の器形をしている。内面沈線はなく、口縁部にはヨコナデ→横帯文→区切り文（蛇行垂線）が施され、阿部氏によると「横帯文を描く一本づつの沈線の内面はナゾリによって太く、しっかりと引かれている」。胴部には粗縄文が施されており、底部には網代痕がはっきりと残されている。外面調整は底辺部が縄文施文後にヨコ削り→下から上へのタテミガキである。内面調整は口縁部～胴部がヨコナデ→ヨコミガキ、底部は回転ミガキである。黒斑は正面左側と右側の180°対称位置に２ケ所ある。

第１図－４は加曽利Ｂ２式の鉢である。口径8.9cm、底径4.8cm、器高8.4cm、胴部最大径11.2cmを測る。胴部には粗縄文LRが施されている。外面調整は屈曲部より上の口縁部がヨコミガキでよく磨かれており、底部はヨコナデである。内面調整は口縁部がヨコナデ、胴部～底部は



第１図　六通貝塚出土土器①

ヨコナデ→ヨコミガキで底部のミガキが念入りにされている。黒斑は正面右側と左側の180°対称位置に２ケ所ある。

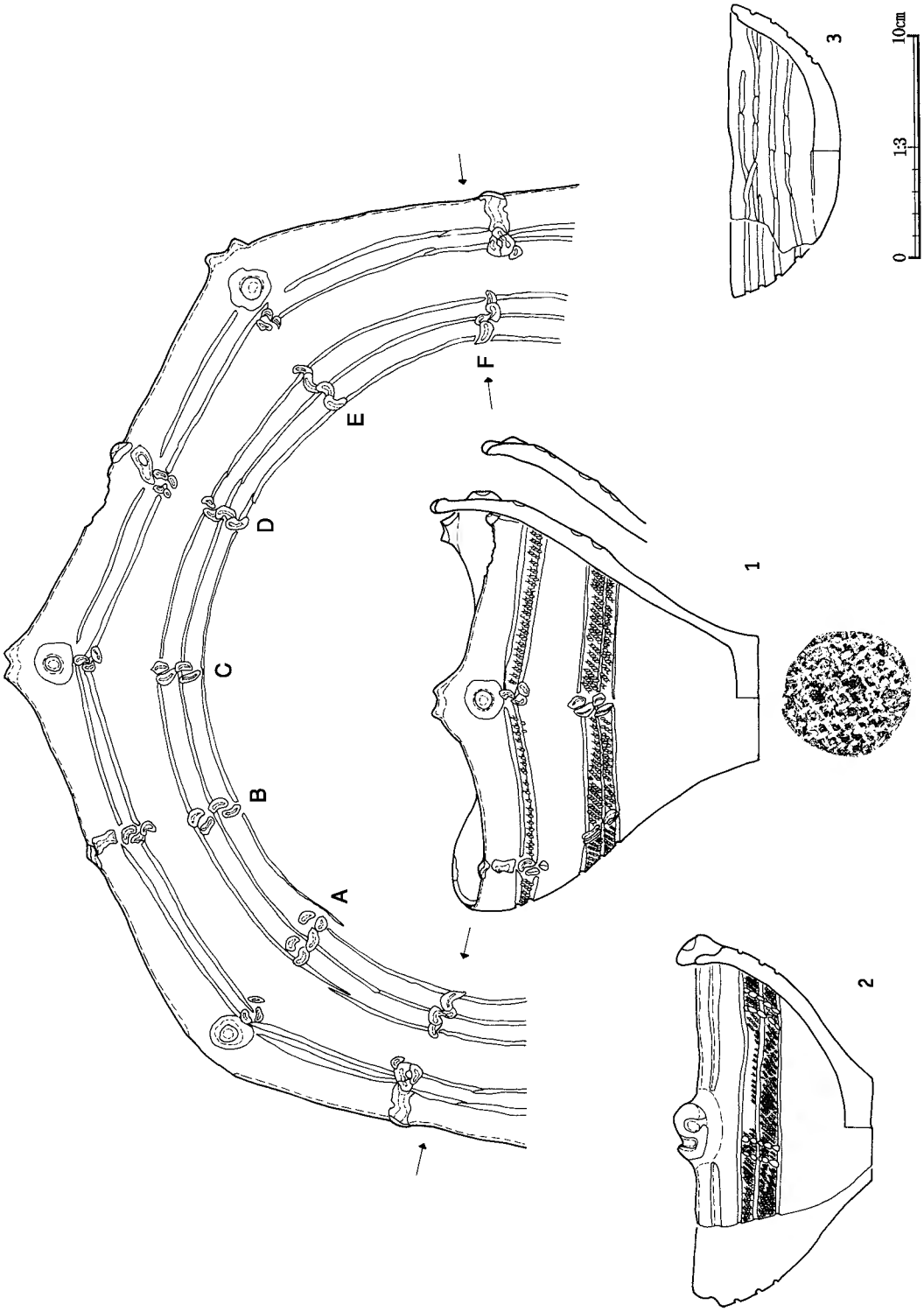
第１図－５は加曽利Ｂ１式の鉢である。口径9.0cm、底径3.6cm、器高9.5cm、胴部最大径10.7cmを測る。胴部には地文縄文LRが施され、口唇部には沈線が１条めぐっている。底部の網代痕は一部がナデで磨り消されている。外面調整は口縁部が縄文施文後にヨコミガキ、底部が縄文施文後にヨコナデである。内面調整はヨコナデ→ヨコミガキである。黒斑は正面右側と左側の180°対称位置に２ケ所ある。第１図－４・５は底部の端が人為的に磨り減っており、籠などの容器に入れて用いた可能性が考えられる。

第２図－１は加曽利Ｂ２式の鉢である。口径18.0cm、底径5.6cm、器高14.8cm、胴部最大径18.6cmを測る。器形は緩やかに外反し、３単位の波状口縁と６単位の単位文を有する。波頂部直下に円形の瘤が貼り付けられ、波底部には小突起と縦長の瘤が貼り付けられている。胴部には横帯文が施され、瘤貼付→沈線区画→LR縄文→ミガキ→単位文の順で施されている。底部には網代痕がはっきりと残されている。外面調整及び内面調整はヨコナデ→ヨコミガキである。６単位の単位文がそれぞれ異なる形態を持っており、区切り文から蛇行垂線に変化していく過程（A→B→C→D→E→F）が１個体の土器に表現されているものと考えられる。BとCよりもA、EとFよりもDを古いとする理由は、８回区切りが行われ、右→左→右→左の順序が守られているからである。黒斑は７ケ所ある。

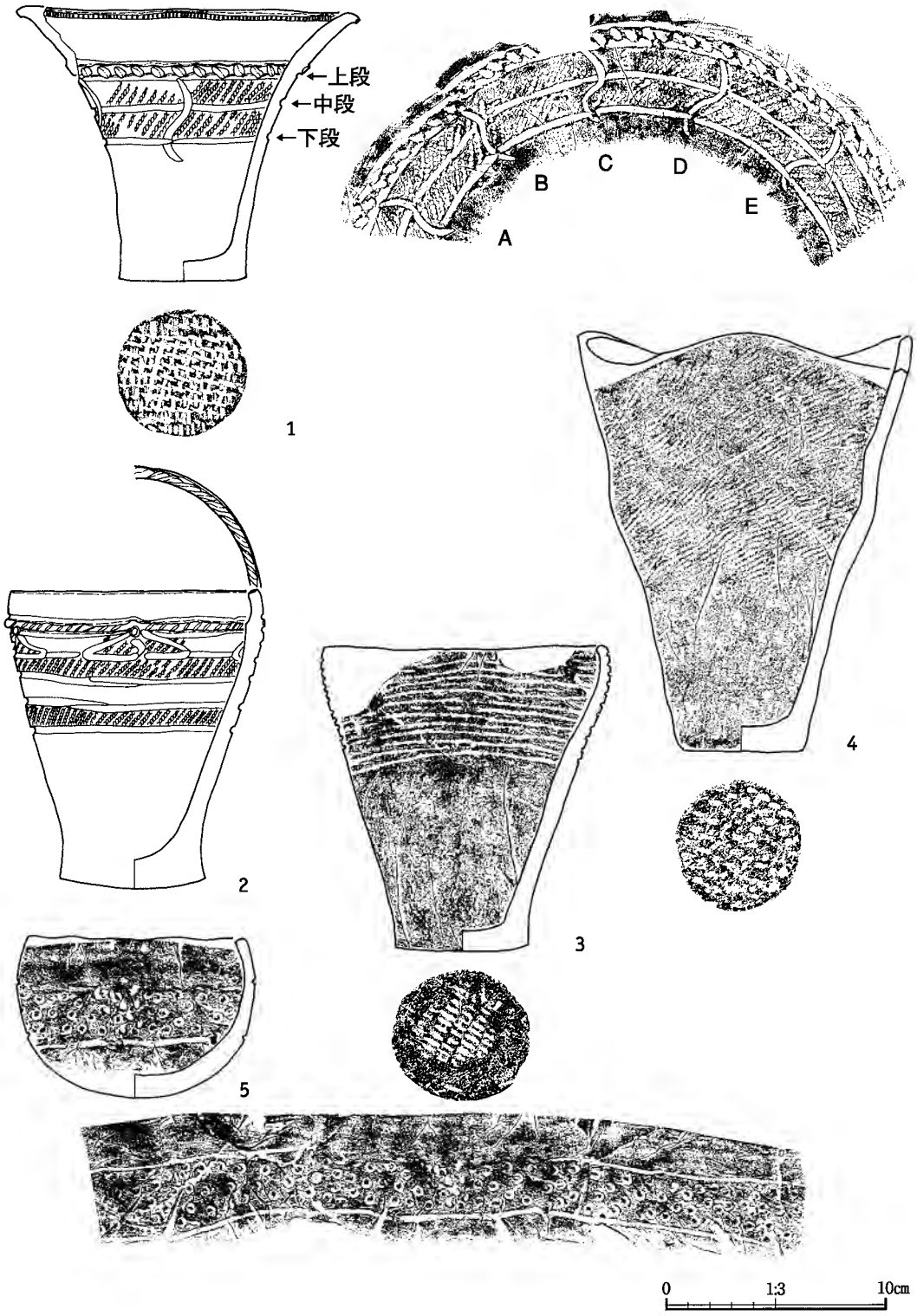
第２図－２は加曽利Ｂ１式の浅鉢である。口径15.0cm、底径4.6cm、器高9.0cm、胴部最大径16.2cmを測る。口縁部にはメガネ状突起を有し、口唇直下に沈線が１条めぐる。胴部には横帯文が施され、縄文LR→沈線区画→区切り文→磨り消し・ミガキの順で施されている。外面調整は口縁部と胴部がヨコナデ→ヨコミガキ、底辺部がナナメナデ→ナナメミガキ、底部がナデである。内面調整はヨコナデ→ヨコミガキである。黒斑は正面左側と90°右側の位置に２ケ所ある。

第２図－３は加曽利Ｂ２式の浅鉢である。口径13.2cm、底径3.0cm、器高5.0cmを測る。口縁部には内面沈線が１条めぐるが、ミガキにより消えかかっている。胴部には横位の沈線が４条施されており、施文は左回りで、左利きの人が施したかあるいは右利きの人が土器を逆さまにして施した可能性が考えられる。外面調整は口縁部から胴部の施文部がヨコナデ→沈線→ヨコミガキの順で施文されており、沈線が地文扱いになっている点が注目される。丸底の底部は回転ミガキである。内面調整は口縁部が沈線施文後にヨコナデ→ヨコミガキ、胴部はヨコナデ→ヨコミガキ、底部は回転ナデ→回転ミガキである。

第３図－１は加曽利Ｂ２式の深鉢である。口径15.6cm、底径5.8cm、器高12.5cmを測る。大きく外反した口縁部の先端、口唇上に刻目列を有する。また、隆帯上にも刻目列を有するが、隆帯貼付→沈線区画上段（２列）→刻目列の順で施されている。胴部には横帯文が施され、縄文



第２図　六通貝塚出土土器②



第３図　六通貝塚出土土器③

LR→沈線区画中段→５単位のうち４ケ所の区切り文（B・C・D・E)→沈線区画下段→ミガキの順で施されているが、沈線区画下段→１ケ所の区切り文（A）と１つだけ施文順位が逆転している。底部には網代痕がはっきりと残されている。外面調整は口縁部がヨコナデ→ヨコミガキ、胴部がタテナデ→タテミガキである。内面調整は口縁部～胴上半部がヨコナデ→ヨコミガキ、胴下半部がヘラナデ、底部はナデである。

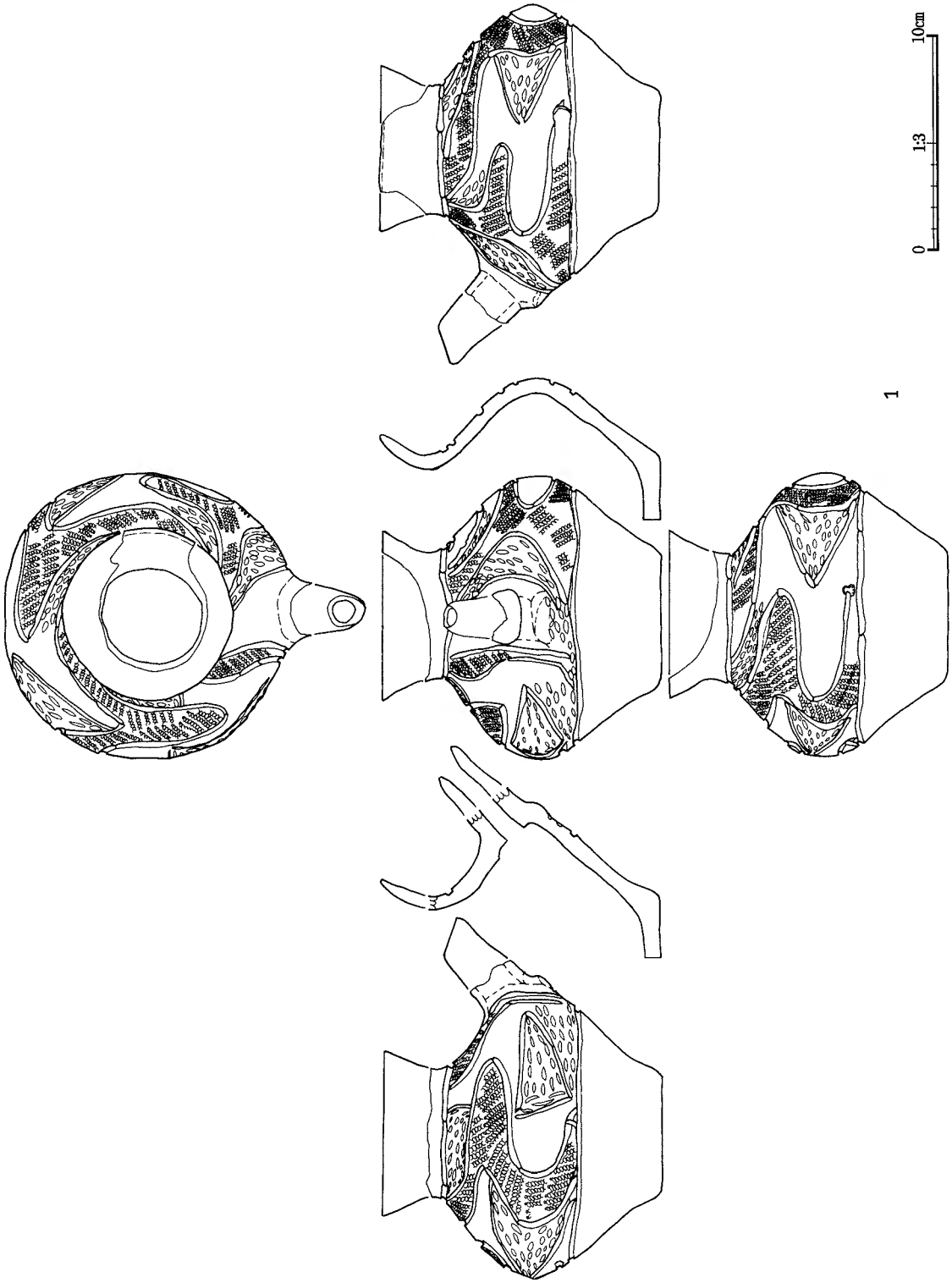
第３図－２は加曽利Ｂ１式の深鉢である。口径11.4cm、底径6.6cm、器高13.7cm、胴部最大径11.8cmを測る。口唇上と口縁部の隆帯上に刻目列を有する。胴部には横帯文が施され、縄文LR→沈線区画→区切り文（５単位)→ヨコミガキの順で施されている。底部は丸く張り出し、土器を上下逆にして底部を成形した可能性が考えられる。外面調整は口縁部がヨコナデ→ヨコミガキ、胴部がタテナデ→タテミガキ、底部が回転ナデ→回転ミガキで、よく磨かれている。内面調整は口縁部がヨコナデ→ヨコミガキ、胴部がタテナデ、底部が回転ナデである。

第３図－３は加曽利Ｂ２式の深鉢である。口径12.6cm、底径6.0cm、器高13.8cm、胴部最大径13.2cmを測る。胴部には横位の沈線が11～12条施されている。底部は網代痕が残されているが、一部ナデにより磨り消されている。外面調整は口唇部がヨコナデ→ヨコミガキ、口縁部から胴部の施文部が沈線→ヨコミガキの順で施文されており、沈線が地文扱いになっている点が注目される。胴下半部はタテナデ→タテミガキである。内面調整は口縁部がヨコナデ→ヨコミガキ、胴部はタテナデ→タテミガキ、底部は回転ミガキである。黒斑は正面左側と90°右側の位置に２ケ所ある。

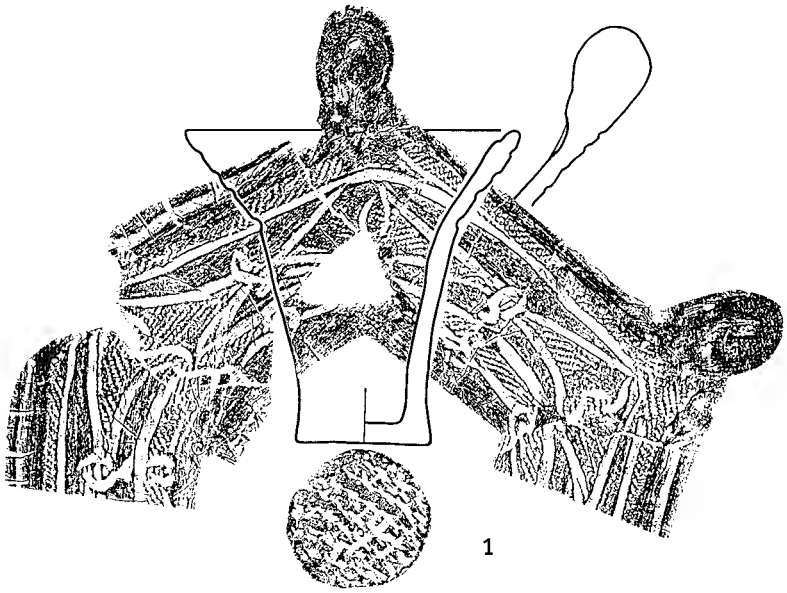
第３図－４は加曽利Ｂ２式の深鉢である。口径15.2cm、底径5.2cm、器高19.0cm、胴部最大径12.2cmを測る。３単位の小波状口縁を有する。口縁部～胴部には地文縄文Ｌが施されており、底部は網代痕が残されている。外面調整は口唇部が縄文施文後にヨコナデ→ヨコミガキ、胴下半部が縄文施文後にタテナデ→タテミガキである。内面調整は口縁部がヨコナデ→ヨコミガキ、胴部はタテナデ→タテミガキ、底部は回転ナデである。

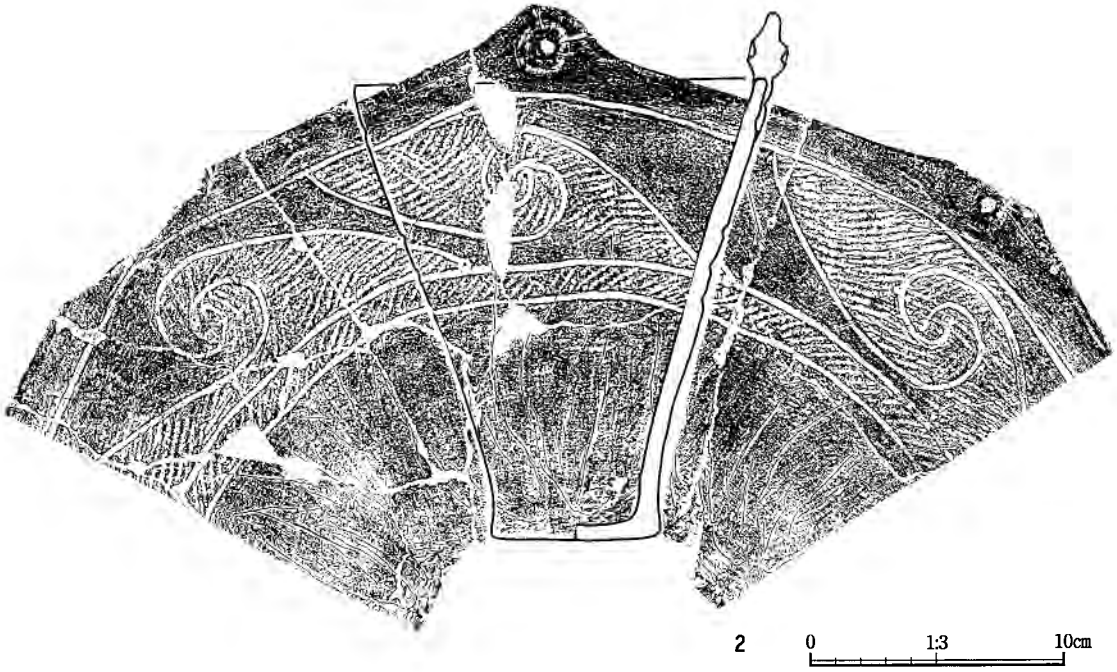
第３図－５は加曽利Ｂ２式の浅鉢である。口径10.0cm、底径5.0cm、器高7.4cm、胴部最大径11.0cmを測る。胴部にはヨコナデ→半截竹管による刺突充填→沈線区画→ヨコミガキ→さらに正面のみ刺突、の順で施されており、土器の正面を意識したものと考えられる。外面調整は胴部施文部以外の口縁部と底部では、ヨコナデ→ヨコミガキでよく磨かれている。内面調整は口縁部～胴部がヨコナデ→ヨコミガキで、底部は回転ミガキである。黒斑は底部付近に大きく広がっている。

第４図－１は加曽利Ｂ２式の注口である。口径7.8cm、底径6.4cm、器高13.0cm、胴部最大径13.2cmを測る。口縁部の大部分と注口部が欠損している。頸部と胴下半部で区切られた胴部文様帯にはいわゆる「トの字文」が施され、沈線区画→RL縄文充填・刺突充填→沈線縁取り（二重)→ナデ・ミガキの順で施されている。外面調整は口縁部がヨコナデ→ヨコミガキ、注口部



第４図　六通貝塚出土土器④





第５図　内野第１遺跡J-122号住居跡出土土器

がタテナデ→タテミガキ、胴下半部がヨコナデ→ヨコミガキで、底部がナデである。内面調整は行われていない。

４　まとめと今後の展望

今回、紹介した資料は加曽利Ｂ２式の古い様相の土器（第２図－１、第３図－１など）がまとまっており、千葉市花見川区宇那谷町に所在する内野第１遺跡J-122号住居跡出土土器群（第５図－１・２）に対比することができる。紹介した復元個体の他にも破片資料が多数存在し、それらを加えて六通貝塚出土土器群の位置付けを行っていく必要がある。

謝辞

今回、資料紹介の機会を与えていただくとともに、ご協力を賜った千葉市立加曽利貝塚博物館並びに関係機関に感謝の意を表したい。また、小論を執筆するにあたり、様々な助言を与えてくださった方々にここに記して謝意を表したい。秋田かな子、阿部芳郎、猪瀬美奈子、江原英、菅谷通保、宮内慶介、吉岡卓真（五十音順・敬称略）

註１：阿部芳郎氏が報告した遠部第Ⅲ類土器にあたる（阿部2001）。今回阿部氏の実測図を再トレースさせて頂くとともに、事実記載の点でも参考にさせて頂いた。

（財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター）

＜六通貝塚関連文献＞

千葉市史編纂委員会 1974 『千葉市史　第１巻』原始古代中世編

千葉市史編纂委員会 1976 『千葉市史　史料編１』原始古代中世

米田耕之助 1977 「千葉県六通貝塚出土の異形台付土器」『古代』62

千葉県教育委員会 1983 『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』

宮城孝之 1986 「六通貝塚貝層範囲確認調査」『研究連絡誌』18

百瀬幸徳 1996 「千葉市六通貝塚」『平成７年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』

西野雅人 2000 「六通貝塚」『千葉県の歴史　資料編　考古１（旧石器・縄文時代）』

千葉市教育委員会 2003 『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書－平成14年度－』

㈶千葉市教育振興財団 2003 『埋蔵文化財調査センター年報15－平成14年度－』

＜資料出典＞

阿部芳郎 2001 「遠部第３類土器の系譜と変遷」『縄文時代』12

㈶千葉市文化財調査協会 2001 『千葉市内野第１遺跡発掘調査報告書』

※　他に多くの参考文献が存在するが紙数の関係で省略させて頂いた。